

加賀蒔絵

加賀蒔絵は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩（現在の石川県と富山県）で発展した装飾漆器の一つである。現在の金沢漆器へと発展した加賀蒔絵は、柔らかい漆に金粉などの金属粉を塗る「蒔絵」の様式による、複雑で華麗なデザインで知られている。

江戸時代、加賀藩は富豪・前田家によって統治されていた。前田利常（1593-1658）は、蒔絵師である清水九兵衛（?-1688）と初代・五十嵐道甫（?-1678）を金沢に招き、漆器の工房を設立させた。二人は加賀蒔絵の代表的な作品を制作し、その技術を後継者に伝えた。これにより、金沢を一大漆器産地となった。

蒔絵の技法には、文様を平らにするもの、盛り上げるものなど、様々な方法がある。加賀蒔絵は、これらの方法を組み合わせて、立体的な構図を作り出すのが特徴である。そのデザインには、螺鈿や砕いた白い卵殻もよく使われている。

加賀蒔絵は、前田藩主の趣味嗜好を反映したものであった。自然をモチーフにしたものが多く、特に有名な和歌や民話に登場する吉祥文様を参考にしたものがよく作られている。加賀蒔絵は、馬具や鎧、鞍などの武具、書見台や茶道具などの豪華な生活用品にも施された。